

図書 紹介

マスクと日本人

著者：堀井光俊（秀明大学）

発行：株式会社 SHI / 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-14 /

電話 03-5259-2120 / B6 判 / 267 頁 / 価格 1500 円（税別） / 2012 年 12 月 3 日発行

花粉症が定着してから多くの人々がマスクをするようになり、インフルエンザが猛威をふるうようになった数年前からマスク人口が急増している。今春(2013 年)は中国から黄砂や PN2.5 という有害な微少物質が例年になく多く飛来してきている。これらの防止にもマスクはほとんど効果がないとも言われているものの街中も車中もマスク姿の人たちで溢れているが、海外では、マスク姿はほとんど見られないという。

著者は、英国立ケント大学で学び、イギリス在住で同大学の客員研究員で秀明大学准教授でもある。本書は、マスクの効果を科学的に解明しているのではなく、“日本人はなぜマスクを着けるのか？”そんな疑問について、歴史や文化、社会学など様々な側面から考察した面白く、かつ珍しい本である。

第 1 章 序論

第 2 章 マスクを客観視する

第 3 章 日本ではどう使われているのか

第 4 章 インフルエンザが呼び起こした黎明期

第 5 章 ワクチン接種と花粉症予防

第 6 章 2000 年以降も社会的に浸透

第 7 章 リスク儀礼としての位置づけ

小見出しを見ていくと第 1 章は、マスクの定義 / 時代的背景 / 本書の構成である。第 2 章は、英語メディアにも登場 / 予防に関する科学的根拠 / 新型インフルエンザの流行で、英語文献で紹介されている日本人のマスク着用に関する意見や日本人の「あたり前」な習慣を「ソト」の視点から眺めた不思議さなどが記述されている。第 3 章は、風邪やインフルエンザにたいする利用 / 花粉対策としても / 筆者による調査結果で、多くの日本人が日常的に実践しているマスク着用という行為自体について深く掘り下げているが、“日本人はなぜマスクを着けるのか？”という問いに対する答えは難しいという。第 4 章は、サージカルマスクの起源 / 「スペイン・インフルエンザ」 / 日本におけるマスク前史 / 1920(大正 9)年 1 月 / 1920(大正 9)2 月以降 / 日本人とインフルエンザの文化史 / 大正時代における象徴的意味で、マスク着用の黎明期の新聞

記事を資料に起源と受容の過程を追跡している。第5章は、終戦～1950年代／1960年代／1970年代／1980年代／1990年代のマスクの変遷を追っている。第6章は、2000年代／女性にとっての価値／「咳エチケット」／道徳としての予防／2009年の新型インフルエンザ報道で、マスク着用はインフルエンザと花粉症対策で社会的浸透を深め、社会不安の救世主となった。第7章は、リスクと行為／マスク着用の「構造」／「お守り」の一種か／道徳と機能／社会的な配慮として／健康の「個人化」／「後期近代」の危機／孤立する自己を守るで、リスクをキーワードにマスク着用論を論じている。第2～7章にはそれぞれまとめとして小括を設けてられている。

マスクの着用について日本では、大都会＝世界的にもまれな人口密度／インフルエンザや花粉症を煽るマスコミ／他人に迷惑をかける人に対して厳しい社会／顔隠し／衛生面、健康維持にうるさい国民性／学校の給食当番／ランナーやジョガーが心肺能力を高めるためなど、また、かなり奇妙にうつる海外では、他の人に病気を移したくない／花粉症なので花粉を吸い込まないように／病気ではないが、病原菌を移されたくないから／歯の治療中なのでそれを隠すため／口臭がばれないようになどが理由としてあがっている。

日本でマスクが話題になり始めたのは「スペイン・インフルエンザ」が猛威を振るった大正時代（1920年代）という。それから約90年、マスク着用がどう浸透したかの検証は興味深い。その上で、著者は、マスクの効果，歴史を客観的に調べて整理し，日本人にとってマスク着用は“儀礼的行為”であり、リスクや不安から逃れるための“現代のお守り”であると指摘している。巻末には参考文献も付しており、マスクを通した日本文化論になっている（学会事務局）。